光明寺だより

第110号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030　西条市大町550
TEL 0897-53-4583

心に残る詩

象の親子　埼玉県　関根裕治　49

象の母親は急ぎ足で
水場へと突きすすむ
はやく水を飲まないと
お乳が出ないから
でも急ぎすぎると
子が追いつけないので
はぐれてしまわぬよう
何度も立ち止まる
そんなもどかしさが
人の親にもあるだろう
突きすすむ愛と
立ち止まる愛の狭間に
我が子を守るすべを
必死にさがして

産経新聞「朝の詩」より

「新盆合同追悼法要」は中止いたします

昨年に続き、本年も新型コロナウイルスの感染予防のため新盆合同追悼法要は中止いたします。それぞれ、ご自宅で追悼して下さい。
お寺では新盆の「おつとめ」をしておきます。
ご自宅でのお飾りは法事の時と同じです。
盆提灯や精霊（しょうりょう）棚はしません。迎え火、送り火もしません。

★本紙４ページに、お盆のことを説明をしていますので、ご参照下さい。

一口法話

「人と生まれて、人になる」

人間は他の動物と違い、この世に生まれただけでは、本当の人間にはなっていません。「自分一人で大きくなった。自分一人で偉くなった」と、思っている間はダメなのです。「そうではなかった。大きなご恩の中に生かさていたのだ」と目覚める時、本当の人間に生まれ変わるのです。

次のようなお話があります。

ある会社の入社試験でのことです。

筆記試験を済ませたA君は口頭試験を受けるため面接室に入りました。

大きな会社なので、口頭試験ではおそらく経済学や社会学の専門的なことが聞かれるのだろうと、A君は一生懸命勉強してきました。

面接室に入ると、正面に4、5人の検査官がいて、その真ん中に社長さんが座っていました。その社長さんの最初の質問は、

「君は生まれてから今日までに、親の体を洗ったことがあるかね」

予想外の質問にA君はびっくりして、

「い、いいえ、按摩（あんま）ぐらいならしたことがありますけれど、親の体を洗ったことはありません」

と答えました。すると社長さんは、

「そうか君は、お父さんを早く亡くして、母一人子一人だね」

と言いました。

「はい、そうです」

「それじゃ、今日帰ったら、おかあさんの体のどこでもいいから洗ってあげなさい。その上で、明日改めて面接をする。今日はもう帰りたまえ」

A君は、「弱ったなあ、困ったなあ。」と思いながら家に帰りました。

しかし、どうしてもあの会社に入りたいという強い思いがありますから、どこを洗おうかと、思案しました。母親は反物の行商をして歩いています。「そうだ、おふくろは、足が汚れているだろう。足なら簡単にすむ。足を洗おう」と思い立ち、大きな盥（たらい）に熱いお湯を沸かして、母親を待っていました。

母親が帰ってきました。A君は「今日は、お母さんの足を洗ってあげるよ」と言いました。しかし、ふだん、バカの何のと母親を見下している息子が、急にそんなことを言ったものですから、母親はびっくりして、

「いいわ、自分の足は自分で洗うわよ」と言ったところ、A君は、

「今日、会社に口頭試験を受けに行ったら、変な社長がいてね。お母さんのどこでもいいから洗えって言うんだ。だから洗わなくてはいけないんだ。お母さんすまないけれども洗わせてくれ」

と頼んだそうです。

「そうね、それじゃしょうがないわね」

と言って、上り口に腰を下ろし、息子の汲んでくれた盥（たらい）のお湯の中に足をつけたのです。

A君は、母親の足を洗おうとして、盥（たらい）の向こう側にしゃがみ、何気なく母親の足を握りました。

母親の足は、女の足ですから、細くて柔らかくてきゃしゃだろうと思っていましたが、そうではなくて、石のように硬くごつごつしていたのです。

その石のように硬い、ごつごつした母親の足を握りしめた時に、A君の胸に熱いものが込み上げてきたのです。そうして母親の足を握りしめたまま、おいおい声をあげて泣いたそうです。

翌日、A君は会社に行って言いました。

「社長さん、私は大学まで出してもらいながら、これまで親の恩について深く考えたことはありませんでした。この度、社長さんにご縁がありまして、初めて親の恩とい

うものを教えていただきました。ありがとうございました。もう私は、この会社に採用されても、採用されなくても結構です。生涯、母を大事にして生きていこうと思います」

と言ったそうです。

『いのちに出会う旅』竹下哲著より

A君は、母親の足が石のように硬くなる事実を通して「自分一人で大きくなったなんてとんでもないことだった。母親の大きな愛情に包まれ育てられてきたんだ」と、そのご恩の深さに気づかされ、本当の人間に生まれ変わったのです。

ところで私たちはどうでしょうか。

どちらかと言うと、「自分一人で大きくなった。自分一人で偉くなった」と思っています。そんな私たちが本当の人間に生まれ変わるにはどうすればいいのでしょうか。それは、この私は生かされ続けているという事実に目覚める以外ありません。

その最も重要な事実は、「この私は息をしている」という事実です。

「そんな簡単なことで・・」と思われるかもしれませんが、大変重要な事実なのです。

というのは、「息」は決して自分の意志でしているのではないということです。

自分の意志で息をするというのは「今から息を吸うぞ！次は吐くぞ！」と、いうようにすることを言うのです。

もし、そんなことをしておったら、夜もおちおち眠れません。私たちが毎日安心して眠られるのは、自分の意志に関係なく、息をさせる「ハタラキ」というものが備わっているからです。

心臓はどうですか。

心臓も自分の意志で動かしている人はおりません。（もっとも止まる時も、こちらに相談なく止まりますが・・・）

この息をすることも心臓が動いていることも人間の生命のもとですが、その生命のもとがすでにわが手にはないのです。そこには自分のいのちを生かし続ける「ハタラキ」というものが存在しているのです。その「ハタラキ」はもちろん人間が作ったものではありません。

また、食べることを考えてみましょう。たとえば我々の主食である「米」ですが、お米は農家の人が作ったと思っているでしょうが、作ったのではなく育てたのです。お米を作り出すことなどは出来ません。しかも、そのお米が育つためには、大地、水、空気、太陽、雨、風等々が必要です。

そうしますと、一粒のお米が出来るためには天地一切のめぐみが備わらなければなりません。つまり、私のいのちはこの宇宙に存在するもののどれ一つ欠けても、成り立たないということを意味しています。

これを道元禅師（曹洞宗開祖）は「尽十方界真実人体」と仰っています。この宇宙全部が自分の体であるというのです。

まさに、私たちは、我がいのちを生かし続ける「ハタラキ」の中に身を置いているのです。

この「ハタラキ」は人間の力を超えておりしかも、あらゆるものを生かそうとするものです。それを、仮に「仏（法身仏）」と称しているのです。

こうしてみますと「自分の力で生きてきた」などとは思い上がりも甚だしいことが分かります。思えば、生きるに必要なものはすべて与えられていたのです。

このことに心の底から頷くことができるようになった時、私たちは本当の人間に生まれ変わるのです。それは「人と生まれ、人になる」ということであります。

新型コロナウイルスの感染予防のため、今年の「新盆合同追悼法要」は中止させていただくことにしました。お盆は仏教行事の中で最もよく知られた行事です。そこで、お盆にかかわる疑問点を解答します。

問　なぜお盆と呼ぶのでしょうか？

答　お盆は正式には「盂蘭盆（うらぼん）」と言います。これはインドの古い言葉「ウランバナ」を音写したものです。意味は「倒懸＝逆さまに吊るされる＝大変な苦しみ」ということで、このような苦しみを受けている者を救う仏事を盂蘭盆会、盆会、略してお盆というのです。

問　お盆の期間はいつからいつまでですか？

答　「盂蘭盆経」の説話によれば、旧暦７月15日にあたります。それが、いつの頃からか、13日に亡き人の霊がこの世にかえり、14、15日と滞在し、16日に再びあの世にかえるという民間信仰が定着しました。この通説から、現在は、13日～16日の間がお盆ということになります。

ただし、浄土真宗では亡き人は命終えると同時に、阿弥陀さまのご本願のハタラキ（本願力）で直ちに仏さまになられます。そうして、迷える私たちを救うために、すぐさま娑婆（しゃば）世界へ還ってこられ、いつでもどこでも、私たちを護（まも）り、導いて下さっていますので、お盆の時しか、かえらないという事はありません。従って、迎え火や送り火はしません。

問　どのようなお飾りをすればいいのですか？

答　浄土真宗では、お盆だからといって、何か特別なお飾りをすることはありません。

しかし、お盆のご縁を大切にする意味合いから、お仏壇をお掃除し、お法事の時のように、仏具は五具足（ローソクたて一対・花立一対・香炉）にして、お菓子・果物・お餅をお供えするのが良いでしょう。

また、他宗では、亡き人の霊を迎えて追善回向（ついぜんえこう）をするために、「精霊棚（しょうりょうだな）」といったものを用意します。精霊棚の前で読経することから「棚経（たなぎょう）」と呼ばれています。

浄土真宗ではこうした棚はしません。

問　浄土真宗のお盆の意義とは？

答　古くから民間信仰としてご先祖がかえってくるといわれるこの時期に、亡き人のご恩を偲（しの）びつつ、「この私もいずれ、お浄土に参らせて頂きます」と、私のいのちの帰るべきふるさとがお浄土であることを、改めて確認させていただく、その尊いご縁にしていくところに浄土真宗のお盆の意義があります。

心に残るおはなし

大阪にある本願寺津村別院より発行されている月刊誌『御堂（みどう）さん』に、松山組の定秀寺（じょうしゅうじ）のご住職・河野正慎（33）さんの、次のような寄稿文が掲載されていました。

お通夜の出来事

大学卒業後、二年間の僧侶の勉強を終え、父が病気で入院したために急きょお寺へ帰ってきました。

一カ月たったころ、六十代の女性のご門徒さんが亡くなられました。喪主は長年、仕事一筋に頑張ってこられたご主人でした。きっと定年後は大好きな奥様と第二の人生を一緒に過ごしていきたいと思っておられたことと思います。お通夜と葬儀には、最近珍しいくらいの大勢の参列がありました。お通夜の時もご主人は参列の方々へのご挨拶も始終気丈にふるまわれていました。お通夜の勤行が終わった後、ご主人が僧侶の控室に挨拶に来られました。

初対面の私に、奥さまとの楽しかった思い出やご病気されてからのことなどをお話しくださるうちに、涙を流されました。奥さまが闘病中から亡くなられるまでずっと病院で付きっきりで、亡くなられた後も、葬儀の段取りから何から何まで大変な時間を気丈に過ごされていた最中、ふと緊張の糸がゆるんだのでしょうか。「寂しいです」と、涙ながらに語られました。私はただただお話を聞くことしか出来ませんでした。

もし私がお袈裟（けさ）をまとっていないどこにでもいる若造だったなら、そんなお話を詳しく聞かせていただくこともなかったかもしれません。僧侶の前だから、「寂しいです」と、涙を流しながらつらかったことをお話ししてくださったのだと思います。僧侶とはそんな存在なのだ、と気づかされました。

お寺に帰ってきたばかりの若い私にいったい何が出来るのだろうかと悩んでいたころでもありました。そんな私にとって、父とそう変わらない年齢のご主人が、親族や参列者の前ではなく、二人きりの控室で肩を震わせながら流したあの涙が、今でも私をお育て下さっています。決しておごることなく、悲しみや苦しみに寄り添うことのできる住職になりたいと、今でもお通夜にお参りするたびにそう思い出させてくれます。

【追記】

先代ご住職（河野正胤師）は、光明寺の本堂落慶法要の時の作法（勤式作法）を熱心にご指導頂いたことがあります。お人柄は大変温厚で謙虚なお方でした。今でもご生前中のお姿が思い出されます。

趣味の広場

俳句を楽しむ（八十九）

森本隆を

今年の梅雨は有って無いような梅雨であっという間に終り、六月の下旬頃からま夏の猛暑の日々でした。今、七月に入ったばかりでこの文章を書いていますが、今回の「光明寺だより」が皆さんのお手元に届く頃はどんなに暑い日が続いているのだろうかと心配です。

さて、前回は仏様や仏教の世界とのご縁を詠んだ春の句を採り上げました。今回はその続きとして夏の句を鑑賞してみて下さい。また、作品はやはり俳人協会会員の作品を使わせてもらい、作者名は省略致します。

先ず、時期的に“暑さ“を詠んだ作品。

父よ久し大暑の墓に歩み寄り
あだし野の石も仏も灼けゐたり
灼くる磴踏みて仏に会ひに行く
秘仏とて厨子を鎖せる暑さかな
雲水の汗の慈顔に布施包む

一句め、お墓というとどうしてもお盆の時の墓参りの印象が残り“暑い“というイメージがつきまといますね。二句めの「あだし野」は京都・嵯峨の奥の地名で歴史的にも有名な古来からの火葬場、墓場のあった所です。三句めの「磴」は石の坂道、または石段の意味です。五句とも、「まったく暑いなあ。」と言っている作者の様子がよくわかります。

次に、今度は逆に“涼しさ”を感じ取って詠んだ句をあげてみます。

涼しさを掃き寄せてゐる寺の庭
手短かの法話涼しき籠堂
み仏にひと膝寄せて燭涼し
月涼し開けっ放しの寺の門
滴りの静けさに座す摩崖仏
法話終へ百の扇の動き出す
扇風機向くたび僧衣ひるがえり

これらの句は特に難しい句ではありませんが、二句めの「籠堂」は、お寺で、信者さんがこもり祈念するお堂のこと。三句め「燭」は灯火、あかりのことです。五句めの「滴り」は、夏に岩や苔などから落ちるしずくのことで、俳句では夏の季語です。また「摩崖仏」は、自然の崖や大きい石に彫った仏像のこと。どの句もお寺の境内や建物に入った時とか、大自然の中で出会った仏様とか、そしてご法話の席やお坊さんの衣の動きなどと、いろいろな場面でふと涼しさを感じて俳句に詠んでいます。

そして日常生活の身の回りにある自然、特に動植物にも仏性を感じ取り句に詠んだものもあります。

動くもの夏蝶ばかり午後の墓
蝉脚をたたみて帰る浄土かな
曼荼羅図なせる紫陽花一雨欲し
無住寺に青葉明りの来迎図
万緑の山へ踏み込む遍路笠

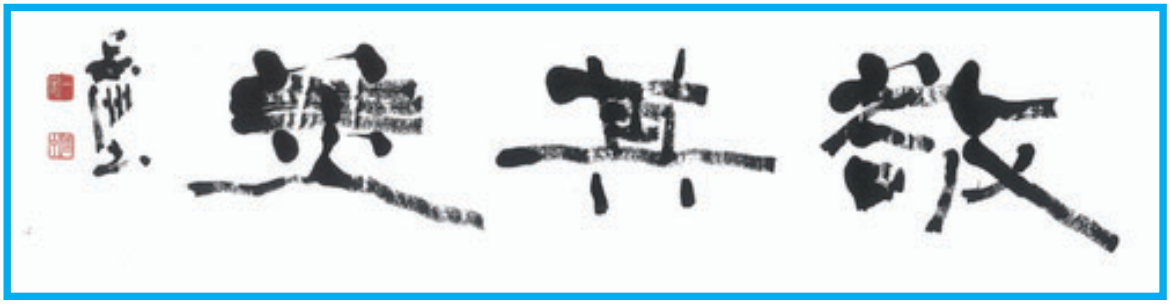
いずれも、生活している中で何かをふと目にした時、仏様の世界やいろいろな場面で感じたことと、つい結びつけて物を見てしまう、感じてしまう事があり、そのまま句にしたものでしょう。この五句は、読んだ人がどう感じるかでかなり意味が広く読めますね。

さて、仏様と言えばやはり蓮の花です。最後にその蓮をテーマに詠んだ句を三句あげてみます。どうかこの蓮の句を味わって少しでも涼味を感じ取り、残る猛暑の日々をお元気で乗り越えて下さい。

み仏に一番咲きの蓮の供華
蓮咲いて億万浄土見る如し
蓮見えて来て極楽の風立ちぬ

では、又、次号で。

住職書作品



【語　句】 敬其美

【読み方】其の美を敬う

BOOK 本

『私の歩んだ仏の道』

発行所　本願寺出版社
著　者　浅田正博
定　価　1220円＋税

本書は本願寺派勧学である著者の宗教的遍歴の書です。他力の教えに納得できず、自力の教えに身を投じ、禅修行に明け暮れ、ついには、他力念仏の教えに目覚めていくという求道の書です。以下のような構成になっています。

1・諸行無常を知る
2・仏教と出遇う
3・仏はおわします
4・阿弥陀仏を見たという体験談
5・自力道へのあこがれ
6・盛永宋興老師との出遇い
7・座禅に励む
8・参禅の厳しさ
9・禅修行の果てに
10・他力の教えのすばらしさに気づく
11・重ねて他力の教えに目覚める
12・土橋秀高先生とお念仏
13・他力の教えに納得しながらも・・・

ご縁を慶び、お念仏とともに
親鸞聖人御誕生850
立教開宗800

【法要期日】

2023（令和5年）

3月29日～5月21日（5期30日）

言葉のプレゼント

「おはずかしい」
「おかげさま」
これが念仏者の日暮らしです

★次回発行予定…12月上旬

「光明寺だより」をご家族の皆さんでお読みください

光明寺のホームページ

南岳山光明寺　検索

話題

★コロナウイルスの感染予防のため、本年も「新盆合同追悼法要」は中止することにしました。

★住職の子どもたちもそれぞれに順調に成長しております。長女（心）は小学校３年生。次女（美乃莉）は小学校１年生。長男（光）は幼稚園年少さんになり、７月で満４歳です。健康で明るく育ってくれることを願うばかりです。

★以前にもお話しましたが、昨年の２月から、ほぼ毎日、散歩に近いウォーキングをしています。このところ、異常な猛暑が続き、歩くのに一苦労していますが、時折吹く風のありがたさが、ことのほか身に沁みます。